資料１５

# 第 31 回日本ジオパーク委員会議事録（案）

日時：2017 年 9 月 27 日（水）9：00-13：15
場所：永田町中央合同庁舎 8 号館 8 階特別中会議室

＜委員長＞

| | | |
|---|---|---|
| 尾池和夫 | 京都造形芸術大学学長 | （日本地震学会） |

＜副委員長＞

| | | |
|---|---|---|
| 中田節也 | 東京大学地震研究所教授 | （日本火山学会） |

＜委員＞五十音順

| | | | |
|---|---|---|---|
| 欠 | 浅野眞希 | 筑波大学生命環境系助教 | （日本第四紀学会） |
| | 阿部宗広 | 自然公園財団専務理事 | （関係団体） |
| | 大野希一 | 島原半島ジオパーク事務局専門員 | （日本火山学会） |
| | 菊地俊夫 | 首都大学東京　都市環境科学研究科教授 | （日本地理学会） |
| | 佃　栄吉 | 産業技術総合研究所 特別顧問 | （日本地質学会） |
| | 中川和之 | 時事通信社解説委員 | （日本地震学会） |
| | 成田　賢 | 全国地質調査業協会連合会会長 | （関係団体） |
| | 橋詰　潤 | 明治大学研究・知財戦略機構特任准教授 | （日本第四紀学会） |
| | 平田大二 | 神奈川県立生命の星・地球博物館館長 | （日本地質学会） |
| | 宮原育子 | 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授 | （日本地理学会） |

＜顧問＞五十音順

| | | |
|---|---|---|
| | 伊藤和明 | 防災情報機構特定非営利活動法人会長 |
| | 小泉武栄 | 東京学芸大学名誉教授 |
| | 高木秀雄 | 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 |
| 欠 | 町田　洋 | 東京都立大学名誉教授 |

〈APGN 諮問委員〉

| | | |
|---|---|---|
| | 渡辺真人 | 産業技術総合研究所地質情報研究部門地球変動史研究グループ長 |

〈日本ユネスコ国内委員会＞

| | | |
|---|---|---|
| | 小林洋介 | 文部科学省国際統括官付国際戦略企画官 |
| | 秦　絵里 | 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐 |
| | 仙台文子 | 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長 |
| | 亦野志保 | 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係 |

＜関係省庁（オブザーバー）＞建制順・省内五十音順

| | |
|---|---|
| 築島 明 | 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官 |
| 遠矢駿一郎 | 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局主査 |
| 渡辺大輔 | 内閣府地方創生推進事務局参事官補佐 |
| 上野俊洋 | 内閣府 政策統括官(防災担当)付 参事官(調査・企画担当)付 火山対策担当主査 |
| 松本直美 | 外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官 |
| 柴田伊廣 | 文化庁文化財部 記念物課文部科学技官 |
| 中村隆史 | 林野庁森林利用課森林環境保全班課長補佐 |
| 二井内 学 | 経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室 |
| 大城久尚 | 国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係長 |
| 三宅里奈 | 観光庁観光地域振興部観光資源課課長補佐 |
| 越田弘一 | 気象庁地震火山部火山課 火山防災情報調整室　噴火予知調整係長 |
| 松平定憲 | 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長 |
| 松本良一 | 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室環境専門員 |

＜事務局＞

| | |
|---|---|
| 斉藤清一 | JGN 事務局長 |
| 野辺一寛 | JGN 事務局次長 |
| 下平明彦 | JGN 事務局次長 |
| 古澤加奈 | JGN 事務局次長 |
| 内藤朋子 | JGN 事務局員 |

委員長：今日は大事な案件ですので宜しくお願い致します。今日は特別な日。ちょうど 3 年前に南アルプスでの会議前に御嶽山が噴火した。御嶽山のような災害を繰り返さないように、とよく言われるが、そのようなこともこの委員会のテーマである。今日はそのようなことも含めた様々な議論になろうかと思う。資料６として前回の議事録がある。会議終了までになにもなければ了承とさせていただく。まず報告事項を事務局から。

事務局：9 月 19 日から 22 日まで中国織金洞ユネスコ世界ジオパークで APGN シンポジウムが開催された。参加者は約 750 人と発表されている。日本からは 65 人の参加があった。次回第 6 回 APGN シンポジウムは 2019 年インドネシアで開催されると発表された。9 月 18 日に行った APGN 調整会議では、規則がようやく採択され、その後、役員改正があり、新たなコーディネ

ーターに中国のホーチンチャン (Prof. He Qingcheng)さん、副コーディネーターに中田先生、韓国のリー(Lee Soo Jae)さんが選出され、渡辺さんと古澤を含めた 11 人の諮問委員が決定した。以上。

委員長：参加されて何か付け加えることはあるか。

顧問：APGN の前に、JGN と中国の CGN との交流があった。また、文科省から補助金をもらって昨年から行っている東南アジアとの交流事業もあり、お互いに知り合いが増えているので発表以外での情報交換が活発になっているように感じる。

委員長：中国はユネスコの始まりの時からのいきさつがある。ずいぶん利益を上げながら行っていると時々言われているが、そのへんはどうだったか。

顧問：基本的に、中国のジオパークは儲からないところはやらないが、保全はきちんとやっている。

委員長：インドネシアはどうか。

顧問：力を入れており、候補地もたくさんある。初期は準備が緩いまま申請書が提出されていたが、現在は他の国を視察するなどして、よくなってきているように思う。大野さんが、最初に認定されたところの再認定審査に行かれて、申請が通った当初に比べて 4 年後はずいぶん良くなったという話も聞いた。

委員長：地球科学的にモデル地域だ。日本列島を同じ縮尺で 90 度回転させると同じ形になるというのがインドネシアの島々。琉球から北海道まで全部同じように重ねられる。同じ現象が起き、巨大地震や噴火が起きている。そのような場所でどんなジオパークが育つか注目している。2 年後、是非行ってご覧いただきたい。

委員：インドネシアの悩みも、火山があるところが次から次にジオパークとしてスタンバイしていること。日本で遭遇している問題がそのうちインドネシアでも起こるだろう。インドネシアからは今回の会議に約 50 名参加していた。参加者数の二番目が日本で三番目がヴェトナム、四番目がインドネシア。途上国からも積極的に国際会議に出てくるようになっている。

委員長：他になければ議題に移る。最初は山陰海岸と阿蘇のユネスコ世界ジオパーク地域の再認定審査。

<u>議題 1：ユネスコ世界ジオパーク再認定地域審査</u>

【山陰海岸ユネスコ世界ジオパーク】

委員：結論から言うと、前回の改善指摘事項については概ね改善が認められた。一方、1 年後に行われた世界の再審査での指摘事項についてはあまりきちんと対応されていない。ガイドについてあまりうまくいっていないことと、外国人受け入れ体制についてはほとんどすすんでいない。英会話を始めたといった程度。インフラ整備についても指摘があったが、進んでいないという状況。前回、西側の鳥取県側を拡大し、不備の指摘があったが、それについてはあらたなサイトが加わりガイドのツアーが行われるなど、特に弥生時代の遺跡が見つかったということでそれがうまく活用されるようになってきている。京丹後のほうでは、カヌーや海

上タクシーを使ったツアーが整備されている。いろいろな拠点施設があるが、まだうまく機能していない印象を持った。特に情報拠点を作ると明言しているにもかかわらず完成していない。学校教育については方向性がよくわからないのだが、京丹後の峰山高校では神戸の高校生と交流しながら良い防災教育を行っている。大きな変化としては、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科が新しく設置され、地域研究をバックアップしている。一番問題なのは管理運営体制で、3 府県の 3 市 3 町にまたがっており、兵庫県が場所と人材を提供して事務局を構え、3 市から事務局員が派遣されている。この体勢にここ 10 年間大きな変化がないために全体の連携を欠いている。それぞれの任期が 2、3 年で、引き継ぎがうまくされていない印象を受けた。学識専門員をこの４月から新たに 1 名雇用した。視察中よく耳にしたが、関係者は協議会事務局を「行政」と呼んでいることに象徴されるように、事務局は業務的なことだけこなしているという印象をうけた。結論としてはユネスコ世界ジオパークとしてはかなり問題を含むので 2 年間の条件付としたいというのが我々審査員の意見。持続的なツアーについては、ガイド部会が立ち上がって、いままでばらばらであったものを連携させるという取り組みがされている。国際対応についてはそれなりにこなしてきているように思う。審査の前後に寄せられた、ジオパークの学識経験者からのコメントによると、「活動がマンネリ化して停滞している。非常に良い活動もあるが取りまとめる人がいないので事務局体制を何とかしてほしい。審査委員が審査で講評したことをあまり真摯に受け止めず議論されていないのは問題。」とのこと。いろいろな要素としては積極的なものもある。一部、旅館やガイドクラブでの連携がみられるが、全体としては連携を欠いていることが大きな問題。このことは協議会の会長は十分理解している。構造的な問題であり仕方ないような言い方をされるのだが、世界ジオパークとして統一感を欠いていることは明らかなのでこの問題についてはきちんと対処すべき。地域の住民との対話もやっていただきたい。よって条件付で結論を出したい。

委員：現地審査でも伝えてきたのだが、学識経験者からのコメントのとおり、問題点がなかなか現場に伝わっていないこともあり、確実に動くようにするためには条件付きが妥当だと考える。その他の活動に関しては、新しい活動や文化サイトの取り上げ方で他の地域のモデルケースとなりうる点もあった。

委員：糸魚川の結論を出すときに、事務局が行政的であると報告したと思うが、その際は、糸魚川の計画としてきちんとアクションプランを示し、やる気が見えたので再認定とした。今回は協議会長自体も問題を認識しているということだが、改善に向けての内部の動きについて、どの部分が動いていないと感じたか。

委員：認識はしているのだが、どうしたらいいのか、という具体的な提案がない。会長は、マネージャーがいないからだと指摘している。

委員：豊岡市は人材育成をずいぶん行っている印象が強い。その手法がジオパークのなかに入っていけば期待できると思ったのだがそうはなっていない。県が事務局を 2 年で交代してしまうということは変えられないのか。

委員：事務局長は、3、4 年勤めてもよい、とは言っているが。連携をとるために、3 県 3 市 3 町が話し合うということがない。定例会はあるが、問題意識すら共有されていないのではないか。

委員長：知事の足並みを揃えないと意味がないということを指摘したのが効きすぎたのか、行政主導が進み、人事が 2 年毎に代わるということが問題になったのだろう。それ以外の人達がいかに支えているのかのほうが問題かもしれない。行政以外のことで何かあるか？

委員：山陰海岸の場合、その世界的価値という必要性がでてくる。次の世界審査の時には当然そのことが聞かれると思う。そこで誰がきちんと説明できるかが重要。大地の成り立ちのもとで自分達の生活や歴史、文化があるのだという立場に立った説明ができるような地域理解度はどうか。

委員：優れたガイドがいておもしろく語るのだが、今、来訪者が山陰海岸のどこを見ているのか、そのサイトがどういう位置付けなのか、日本列島のなかでどのようなことがここでは分かるか、ということが語れていない。訪問者が山陰海岸を理解せずに帰ってしまう。報告書には「迷子になってしまう」、という書き方をしているが、全体を俯瞰できるガイドがまだまだ育っていないという印象を受けた。

委員長：最初のころは私もよく関わっていた。日本海側から海岸を見るということを強調していたのだが、そのガイドもなくなってしまった。世界で一番できたての若い海が目の前にあるのだから海をアピールしないと意味がないと言ったのだが最近はあまり聞かない。また、但馬地震、丹後地震、鳥取地震の断層運動した時からの今回の活動期にかけていろいろ地震が起きたところ。

委員：1 種ガイド 2 種ガイドというものを作り、広域のガイドの仕組みを意識して作るなど、良い見本として見ていたのだが。2 種ガイドは、日本列島、地球を語れるというのがコンセプトの一つに入っていたはずだが、実際はなぜそうなっていないのか。

委員：ガイド部会にしても立ち上がったばかり。指摘されたから 1 種、2 種を導入した。クオリティーまでは十分チェックできなかった。いずれにしても連携の芽が出始めているということは明らかでその芽を摘まないように指導することが重要だ。

委員：まず地元のことを語れるという方が出てきたという段階。

委員長：3 府県 3 市 3 町の連携が行政レベルでもあまりできていないようだし、ガイドも専門家も連携がこれからなので、2 年後の連携をまず見てみようということでよいか。事務局長が頻繁に変わる点も指摘しており、（長く）できる人もいるので、その点をどう変えるかを確認したいので条件付きとし、2 年後にもう一度確認したいという趣旨を伝えるということでよいか。

委員：来年 UGG の再審査がある際、委員会のカバーレターをつける。その際、どう改善されたかということについて何を根拠にして書いたらよいか。

委員長：2 年後に向けてのアクションプランをすぐに出してください、ということではないか。当面の答えが必要。

委員：すべてのアクションプランでなく、どの部分についての回答があればよいのか。

委員：山陰海岸でのアジア太平洋ジオパークネットワーク（APGN）シンポジウムに参加した外国の人たちには、このジオパークが連携していないことがよくわかってしまった。このまま審査を受けるとイエローになるのは明らか。連携がとれるように前向きにどれだけ検討しはじめているかという姿勢が見られれば少しはよいかと思う。そこがポイントだと思う。
委員長：わかりました。今の言葉をそのままコメントに引用しましょう。以上でよろしいか。
一同：同意

【阿蘇ユネスコ世界ジオパーク】
委員：3 日間現地調査をした。昨年、熊本の震災があったことで、交通網が遮断され、拠点施設も大きな被害をうけ、やっと少し動き出したところ。平成 30 年を目処に回復を目指しているということだった。国立公園がかなりのエリアを占めているので環境省との連携が密接。環境省職員も積極的な活動をされていたのが印象的だった。課題であった鍋ケ滝の埋没炭化木、堆積物が見える露頭をどのようにするか明確なものはなかった。阿蘇黄土ジオサイトが、企業との連携、ガイドと連携した教育活動で非常にうまくすすんでいた。教育については、残念なことに教育関係当局から、学校教育にどう活用しているのか等について何の説明もなかった。草原文化とジオとの関わりについてはもう少し人文社会、生態学の関係者が入らないとストーリーがうまくいかないのでは。管理体制については、前回と大きく変わっている。事務局がデザインセンターから阿蘇火山博物館に移った。その際に地震が起きてしまった中、移転の整備がすすんでいない。特に人材不足は深刻だ。専門職員を雇用しようとしているが、給料の安さのため応募がないのではないかと思った。事務局体制については以前にも増して弱体化しているように感じた。ツーリズム、地域の連携について。自治体の枠を超えたモデルツアーは作られていない。ASO 田園空間博物館は拠点施設として整備がすすんでいる。スタッフも充実しているが、責任者は阿蘇市のことだけしかやらないと言っている。そこからどのように周辺の外輪山や草原のほうに人を運ぶかについてもうまくいっていないような気がした。南阿蘇鉄道のトロッコ列車も復活し、車掌による解説も内容がより深くなり面白かった。終点の高森駅もジオパークの拠点として整備されるのだろうとは思うがまだまだこれから。阿蘇の博物館もかなりの被害をうけ、復旧途中。その中でビジターセンターを来年前半までに設置すると環境省からも説明をうけたが、まだ具体的な説明はなかった。震災ミュージアム、震災遺構をどうするのか。県のほうでミュージアム構想があるとのことなので、ジオパークと結び付けたらどうかと言ってみたが、具体的な説明はなかった。防災について。阿蘇においては、地震、火山、斜面災害といろいろな災害がおきている。だからこそ風評被害に立ち向かうためにも自分達が防災を理解して科学的に説明し安心してもらうことが大事なわけだが、火山が噴火したために近くまで行けず、それがどこまですすんでいるかはあまり確認できなかった。規制や安全管理についてはすでに完成されたものがあるのでその点は心配していない。しかし防災拠点をどのように使っているのか、また、防災教育に浸透させているのかについては復興途中でよく確認できなかった。最後に結論として我々の意見を申し上げる。震災や中岳の噴火があったということで連携があるが、残念ながら活動は停滞して

いる。事務局体制については人材確保と強いリーダーシップが必要。また自治体間の連携についても各自治体に任せているという雰囲気が伝わってくる。外国人対応についても観光協会にはそれなりに対応できているところがあるので、それをうまく活用する必要がある。阿蘇の事務局からはその説明はなく、協力体制については確認できなかった。自治体間の連携についてはまだまだ問題が多い。同時に拠点施設間の連携もまだ。阿蘇の火山博物館内のビジターセンターの設立が期待されているが、当分見せてもらえない。草原文化のストーリーはまだ課題として残っている。ジオサイトの保全についても宿題が残っている。特に世界ジオパークへの貢献については、まだ不十分。阿蘇は、カルデラの内外に人々が生活している。一般的にカルデラは水の中が多いが、阿蘇は人が住んでいる。その文化の発展についてまだ掘り下げていない。世界にアピールできることはまだあるのにできていない。以上で現地調査員としては、復興途上を考慮しても、課題が非常に多いということで具体的なアクションプランを見て判断するべきではないかという結論に至った。

顧問：この状態で（ユネスコの）再認定審査をうけたらイエローカードが出ないという理由がない。イエローカードになると思われる理由は 3 つ。1 つは事務局体制。2 つめは、その中に地球科学者が含まれていないこと。3 つめは現地審査員からもあったように重要な施設でジオパークが見えない。これらを改善しないと厳しい結果がでる、ということは必ず伝えないといけない。

委員長：「京都大学火山研究センター」の予算がついて今度立ち上がる予定。柱状節理を国土交通省が削ってしまったということについてはどうか。

委員：その説明はなかった。それが話題になったのが現地審査から帰った後だった。事務局のイニシアティブがない。復興予算がたくさんつくので、ある意味チャンスだと思う。復興当局と連携ができれば、露頭を見せるとかルートを作ることを一緒にやればいろいろなことができるはずなのに、できないとすれば残念。

委員長：露頭をきれいに囲む。上からかぶせるような工事をする。蒲島知事は学者で、それに対してはよくわかっていて、いろいろ工夫する発言をされているが。

顧問：4 月に活断層を見に立野峡谷に行った。柱状節理だけではなく、ずれている断層は自然のままでも保存できる持続可能性の高いジオサイト。そのようなところを利用しないのはもったいない。カルデラが湖であった証拠に関連し、世界審査の時に中国の審査員が、これは是非保全して使うべきだ、商売をしたらもっといいのではないかなどと言っていた。私も重要な露頭なのにもったいないと思う。

委員長：地震断層によって畑がずれたところは、知事も是非保存しないといけないと言っているし、地主の方も非常に理解がある。

委員：益城町は（ジオパークに）入っていない。地震後に新しくうまれたジオサイトを活かしていこうという点についてはあまり意識が向いていない。去年の春に事務局が変わったことにも関係があるかと思うが、この点についての展望について、予算も含めて何か説明があったか。

委員：予算書を見せていただいたところ、継続的な予算は確保されている。県もそれなりにサ

ポートしていくという姿勢はあるのだが、具体的に何をどうするとかの案がない。本当にやっていけるのか心配になった。ガイドには震災後の説明ができる人がいて、新しいサイトをうまく使っていこうという意識があるが、それを整理する作業ができていない。事務局の意思決定過程がよくわからない。

委員長：文化庁も含めて省庁が復興に積極的に携わっているが、それがジオパークとどう関連しているのかほとんど見えない。新しく取り込んではどうかという意見もでたが、そのようなコメントもつけて、2年後にまた、ということでしょうか。今のままではだめだとはっきり言わないといけない。早急にアクションプランを作って具体的なことを示すようにとコメントをつけましょうか。それでよろしいか。

一同：同意

委員：前回指摘された事項がほとんど改善されていないという要因についてもしっかり分析をしていただきたい。なぜできなかったのか、現地で振り返っていただかないとまた同じ繰り返しになる。

委員長：次、新規認定審査地域に移る。

議題2：新規認定地域審査

【十勝岳】

委員：概要については、十勝岳を中心とした自然、火山災害、地形であり、観光を中心に発展しているということ。防災教育もし、アイヌの文化も紹介していきたいとのこと。ジオサイトと保全については、ほとんどが大雪山国立公園に含まれているので自然資源の保全は図られている。丘陵の景観保全についても美瑛町と上富良野町が協議会の中心となっているのでそれぞれ景観条例を定めている。一方、ジオサイトの設定には疑問がある。例えば、火口ひとつをジオサイトとしているが、これはアプローチがたいへん。非常に重要な場所ではあるが、本格的な登山をする人でないとなかなか行けない場所。国立公園の山稜部については未整備。解説版がいくつか設置されているが内容は少し整備する必要があると思った。教育研究活動については、十勝岳の災害が昔からあったので防災教育に熱心に取り組まれている。地元の子供達や住民に対しての組織的な支援体制が整備されている。管理組織運営体制について。複数の自治体が協議会を構成するところの問題としてよくある、連携と意思疎通の問題がここでもある。上富良野町に専門員が2名いて事務局が両町におかれているという状況。一体化が見えない。協議はしているという説明はあったが、実際に話を伺ってみるともう少し詰めた議論が必要なのではないかと感じた。いくつか専門部会を作っており、観光ツーリズム部会は、観光客が多いので熱心に活動しているが、他の部会はそれほどではない。両町の体制が非常に強い印象。ジオツーリズムとガイド養成について。山岳ガイドとネイチャーガイドがすでに熱心に活動しているが、動植物のガイドが中心で、地質・地形学的な説明は専門員の人が説明するという状況。ガイド養成についてはまだ準備段階という印象。専門員も十

勝岳については説明ができるが、北海道のなかでの十勝岳の位置づけについては説明がまだ不十分。国際対応については、外国人観光客が多い地域なため、外国表記はあるがジオパークの解説になるともう少し必要。防災・安全については、いち早くハザードマップを作成した地域であり、意識は両町とも非常に高い。また、なぜ美瑛町と上富良野町の 2 町でやるのかというと以前より防災で連携しようという意識が強く、それをジオパークでも打ち出していきたいとのこと。ただ、もう少し連携が必要。熱心であるし、ジオパークの資源としてはたくさんあるし貴重なところだと思うが、ジオパークそのものについての理解をもう少しつめていただきたいと思う。例えば協議会の会長、副会長が実際にジオパークを見学するということをあまりされていないようだ。立派な申請書だが、実際に見てみるとギャップがある。結論として、もう少し準備をしていただいたほうがよいというのが現地審査員の意見。

委員長：これからやる、というのが多かったのか？

委員：計画書としてはこれからやるというのが多かった。

委員：観光地は、ジオパークに認定されなくてもお客が来るのでジオパークに関心が薄い傾向があるように思う。地元の人がジオパークを使って盛り上げていこうという機運はあるか。

委員：協議会の各部会のヒアリングの際は、部会のレベルでは意識はあると思ったが、それが住民まで浸透しているかというと見えなかった。短い審査の中で住民の方とあまり会う機会がなかったが、街中で見る限り、もう少しかなという印象。

委員：国立公園内の山稜部については未整備とあり、整備したほうがよいということだと思うが、レンジャーにはお会いされたのか。大雪山国立公園は保全に関してはいろいろな方針を決めており、山稜部に関しては看板等についても決まりがあるはずで、ジオパークサイドから標識整備をしろと言われてもうまくいかないことがある。もっと他の工夫を含めて、という認識をもってもらったほうが良いと思う。

委員：ひとつ伝えていただきたいことがある。先住民であるアイヌのこと。痕跡がなく取り上げるのが難しいとは思うが、富良野とか美瑛の地名自体、関係がある。和人と自然との関わりだけにフォーカスしないようにしていただきたいと思う。

委員長：一番大事なことだ。

委員：アイヌに関しては美瑛町で新しく作った郷土学館の郷土の歴史や自然を紹介するコーナーで触れている。そういうことは積極的にされている。

委員：隣接している旭川市が「上川中部地域」として新しく準会員になった。十勝岳の申請書には、「十勝岳ジオパーク（美瑛・上富良野エリア）構想」とあり、一緒にすること前提でとりあえず、どちらか先に申請するというふうにも読めるのだが、今後の隣接している地域との関わりについて、事務局から何か説明があったか。

委員：今回の審査で周辺地域の方が参加されるということはなかった。とりあえずは両町で進めていきたいようだ。今後、周辺地域の取り込みもあるかもしれないが、まだまだ両町ですすめていくというのが協議会の方針。

顧問：防災の側面から。1926 年に十勝岳の噴火で 144 人の犠牲者がでた。1985 年コロンビアのネバドデルルイス火山の噴火による火砕流で氷河の氷が溶けて 25000 人の犠牲者がでた。そのこと

を知ったこの二町が、大正泥流がこれらと同じことだったと気づいてハザードマップを作った。全国で、北海道駒ヶ岳に次いで2番目。その後1988年に十勝岳がまた噴火したところ、そのハザードマップをもとにして避難を行った。そこで問題点がでてきたので、さらに改訂版を作った。火山防災という視点から見ると観光と火山防災と両立をさせてきた地域。そういう意味では北海道内では洞爺湖有珠山と並んで双璧だと思う。応援演説のようになってしまったが。

委員長：そのような趣旨がはっきり伝わるジオパークになれ、ということですね。温泉については何かないか。

委員：温泉に関してはあるけれども、今回の審査での案内はなかった。

委員長：さきほどの報告で最後に結論を言われたのは、条件付きで認定するという意味か、それとも見送りという意味か。

委員：もう少し準備してからのほうがよいということで見送り。

委員：北海道は横のつながりを作って動いているように思う。北海道内部からみた問題点があれば教えてほしい。

委員：白滝で活動されている審査員によると、ネットワークにあまり参加されていないそうだ。

委員長：審査員は見送りということだが、他の皆様はいかがか。認定されたらやるのでなく、実績があってからの認定であることを伝える必要がある。

委員：2つの事務局をひとつにしてからがスタートだと思う。

委員：防災教育に関してはとてもすすんでいると思う。観光客への対応も熱心。それをジオパークにどう繋いで展開していくか、ジオサイトのストーリー性の問題。きれいだからジオサイトにするというのではジオパークの趣旨と違う。ジオパークをどうとらえるか、というところでもう少し理解を深めていただきたい。熱心なのは間違いない。

委員長：ガイドさんが動植物に詳しい。

委員：結論に関しては、同意するが、この結論をふまえてどうやっていくかということについては地域資源をうまく組み合わせていくストーリー作りが必要。つまりエリアの既存の観光地と継承されてきた十勝岳のいろいろな自然によるストーリーを作る作業を進めることで自分達のジオパークが見えてくると思うので、その作業を重点的にしていけばよいということを伝えたらよいのではないか。

委員長：（見送りということで）意見がそろった。次に移りたい。

【国引き】

委員：公開版に沿って説明する。審査に加わらなかった委員からもいくつか事前コメントがあり、現地でのそれに対する対応についても記載している。まとめのところで「国引き」という名称について、コンセプトではなく、地域の範囲として使用したい。「国引き」という名称が現地に広く浸透しており、どの範囲なのかということもお年寄りから子供までだいたい分かる。ジオストーリーについては、国引き神話に基づきながら地球科学的に解明するようなストーリーになっている。ジオサイトについては、歴史、文化、生態、生活、産業を結び付けた様々なジオサイトがあるのが特徴。教育研究活動については、社会教育が盛んで、地元の方々が地元を理解する手段のひ

とつとしてジオパークを調べている。ジオパークとは関係ないが、地元紹介のパンフレット作成や、島根大学の協力によって教育研究活動がうまくいっている。管理組織運営体制については、松江市と出雲市の行政と産業界、大学、地域のコミュニティーに加え、副会長が山陰合同銀行の頭取で、銀行が関わることでそこの地域価値創造部といった地域資源をいかに有効に活用するかという支援体制がある。産・官・学・金の連携がうまくいっている。拠点施設については不十分ではあるが現在三か所ある。まだジオパークではないが、ジオパークの展示がされている。学習拠点では出雲科学館があり、ジオパークの地球科学的な実験を小中学生に体験させている。松江駅前の観光案内所にも、ビジターセンターの役割を持つ情報発信の設置を考えている。ジオツーリズムのガイド養成については、社会教育活動としての公民館が中心となって自治会やコミュニティーが地元を紹介するというガイド活動が活発だ。そこにジオパークガイドが乗る形でうまくいっている。また、普通の観光ガイドも神話に基づくガイドが盛んなのだが、ジオパークガイドの養成ということで島根大学が中心となって神話にプラス地球科学的なガイドを加えている。各地でガイドをうけたが、そのやり方は、最初の 3 分の 1 は神話の話をし、次にそれに基づいての地球科学的な現象説明が 3 分の 1 あり、残り 3 分の 1 は、地球科学的なものを利用して実際の生活への活用についての説明をする。例えば美保関では国引き神話がでてきて、クリップを使った日本海形成についての地球科学的な説明をし、最後に海底火山でできた森山石を使っているという非常にわかりやすい説明だった。そのような説明の仕方が松江城でも出雲大社でも統一されていた。なぜそのような説明なのか聞いてみるとプレゼンテーションの際に指摘されて、神話と科学をどのように差別化するかをみんなで考えて決めたとのこと。また、たまたまブラタモリで松江城と出雲が取り上げられた時、そのガイドが出ており、その際に NHK から神話の部分と科学的なことと分けて説明するようにと言われたそう。それでそのようなしくみにしたそうだ。安全、防災についてはそれなりにしっかりできているし、国際対応についても、松江、出雲は国際観光も盛んなので対応ができているのだが、そこの観光客をほかのジオサイトにも呼び込む工夫が必要であり、その点はこれからするということだった。結論としてはジオパークに認定してもよいのではないか。理由としては、地域組織がしっかりしていることと我々からの宿題に対して対応がすぐできるような体制がみんなで相談してできる。科学的な部門についても島根大学が、松江市と出雲市が包括連携協定を結んで、島根大学国引きジオパークプロジェクトセンターを設置し、ジオパークについて全面的に協力する。地球科学だけではなく理学部、法文学部、教育学部といった歴史、考古学、社会教育での全学体制で協力できるのでこれからの向上が期待できる。

委員：神話の話が何からきたか。3 頁の真ん中あたりにある、大山、三瓶山、島根半島あたりの話がたぶん神話になったというのが科学的に正しい認識だと思うが、たまたまプレートテクトニクスがある前に、膨大なイメージを持った。特に申請書に書いてあった、当時の人が水平的な大地の動きをイメージする世界観を持っていたというのはどうか、というのが前回の委員会での指摘事項だったと思うのだが、その点について、変更、あるいは神話と切り分けたとか、例えばプレートテクトニクスについても詳しく説明しているか。

委員：ガイドの説明が（神話と科学を）区別しているのか一緒にしているのかについては、完璧ではないが一応区分されているというのが現地審査員の見解。

委員：さきほどの指摘については注意が必要。神話の内容と科学的事実を一緒にしてはいけない。神話の内容から科学的事実にもっていくことは絶対止めるべき。この名称自体が誤解を与える。今までも地域名がジオパークの名称になっているが、他の名称でのジオパークというのは初めてであるし、国引きという名称の使い方については厳密に議論したほうがよいと思う。世界的にも地域外の名称はほとんど使われていない。マグマジオパークというのはあるが、それ以外はほとんど地域の名称がジオパークの名称になっている。ジオパークがプレートテクトニクスと国引きを結び付けたようなへんな誤解を与える印象があるのでこの名称はよくないと感じている。

委員：3 頁の上のほうに、「国引き」がジオパーク名と重なっているので再検討を要請した、とあるが、これはどういう意味か。

委員：誤解を招くこともあるので検討することを要請した。検討した上での答えとして、「国引き」はジオの意味ではなく、地域の名称として使用したいということだが、さきほどあったように誤解を招きやすいということはあるかもしれない。それは投げ返してもよいかと思う。ただ、地域名称としてたいへん浸透しているということ。

委員：名前について別の観点から。国立公園の名前もだいたいは地域名を使用しているが、上信越高原、中部山岳、西海などは地名がないので悩んでつけた。西海などは造語。教科書に載っていた時はまだよかったが、一体どこにあるのか名前からはわからないので非常に損をしている。その点を反省している人たちがいる。国引きは現地では誰でもわかるのかもしれないが、地域外の人はわからない人が圧倒的に多いと思うので、「国引き」自体がいけないという意見ではないが、地域がわかる名前が必要だと思う。

委員長：私も少し反省している。恐竜渓谷とか黒曜石の名前も出てきたこともあり産物の名称を認めてしまったことがある。将来変更してほしいと思っている。それから、名前は大事だと思っている。

顧問：学術分野で中心的役割の野村先生が、学術会議で神話と混在した話をされた。野村さんに訂正論文を書くことを条件に認めてはどうかと思う。

委員長：それは賛成だ。彼とはずいぶん議論もした。もうひとつは、韓国が文句を言うのではないか、という意見もあった。都道府県名がついている原子力発電所が福島と島根の二か所にあるが、防災という観点から何かあったか。日本の日立製が初めて導入されたところ。

委員：たぶんあまり議論はなかった。

委員長：県庁に一番近い原子力発電所がジオパークのエリアにあるのだが。

委員：11 ある質問の中で、出雲の風土記と、雲南、奥出雲との関係については何か話があったか。

委員：あった。現時点では出雲市と松江市が携わっているが、国引きはもっと範囲が広い。今後はその地域も含めたい。またジオツーリズムも広げたいとのこと。

委員長：島根半島という名称の検討はなかったか。

委員：あまり好ましくないとのこと。島根半島だと平野部が含まれていない。

委員：島根大学の元学長も旗振り役をされていて、大学が大きく関与しているのは良いことであり、ある意味悪いことでもある。大学が全面にでてきている現状で、事務局体制はうまくいっているのか。

委員：確かに島根大学が重要な役割を果たしているのは否めないが、島根大学が全面に出ているかというとそうでもない。大学のスタンスは、学術的なサポート、ガイド養成にとどめていると思う。事務局体制として運営しているのは松江市と出雲市。

委員：私も島根半島の名称を考慮してほしいと思っている。島根半島があるからバリアができて内海が形成され、強い偏西風から逃れるような港ができたり、奥座敷の松江ができたり文化が生まれたといったストーリーもできると思う。是非考慮してもらいたい。

委員：委員会として国引きという名称がふさわしくないということであれば、宿題として名称を変えてください、ということでもよいかと思う。

委員長：名称を変更することによって認めるということか？

委員：ゆざわもそうだった。

委員：今回地元の人は同行されたか。

委員：審査の際は同行していない。境港、米子など、周辺の自治体には声をかけたと言っていた。

委員長：ジオパーク活動としては島根半島が中心となって周辺を取り込んでいるというのは別に問題ない。島根半島というのが地球科学的に意味をもった名称である。それでは、名称は今のままでは認められないということでよろしいか。

委員：委員会としては今の委員長のご発言のとおり、島根半島がひとつの案だということ...。

委員長：ということも含めて、名称の再考を求めるという結論でよろしいか。内容に関しては認定できると。

委員:出雲大社の人と論争があったという記事を読んだことがある。研究者が中心に動いてしまい、問題が起きているジオパークもあったので、その点が大丈夫か。一方で変えてくれる努力がされるのか、また出雲大社との衝突のようなことはもう解決されているのか。

委員長：名称変更の議論はしてくれると思う。神話と学問というと語弊がある。文系の研究対象は神話だから。文系の人にとっては社会科学と神話が学問の対象になるので。神話と自然科学を直接結び付けるのは注意するべき、というのはよい。学術と一般的に言わないほうがよい。そういうことを取り込めということも一方では言うわけなので。神話の研究もすすんでいるし神社巡りツアーも盛んに行っているので、おおいにジオパークに取り込んでほしいところ。よって、表現については気を付けたほうがよい。

委員：国引きを生み出した当時の風土を地球科学的に語っていく、というのが一番良いと思う。国引きが生まれた背景には平野の形成とか人々の交流とかも関わっているので、あまり地球科学的なことばかりを主張してしまうと、科学的でないものを無理に科学的に裏付けしてしまうというミスリードが生じる可能性がある。神話とか考古学の人も含めて名称については検討してもらうことが必要。

委員：考古学や人文社会学専門の人についても委員に入っている。委員の中には小泉八雲の孫である小泉凡氏がおり、ガイドとして説明してくれた。

委員長：結論としては名称を再考するということを条件に認定するということでよいですか。

委員：これは、保留ですよね。

委員長：名前を変えなければ認められないということでよいですか。

顧問：誤解さえなければ、国引きでもよいと思う。島根半島ジオパークと国引きジオパークとどちらに行きたいか、と言ったら国引きジオパークに行きたいと思う。

委員：国引きという名称が国引き神話につながってしまうからおかしい、ということで、国引きが地域名称であるということを明らかにしてもらえればあり得るのかなと思う。ただ、今のままでは混同して聞こえるということを伝えればよいと思う。

委員長：英語にすると？

顧問：Kunibiki.

委員：やはりだめでしょう。

委員：今の議論だと、名前だけ変えるというのではなく、地域名称の他に国引きというコンセプトがこのジオパークのテーマを支えている部分もあるので、もし島根半島と名前を変えてコンテンツの部分が誤解を生むような国引きの話がメインストーリーで入ってくるというようなずれが生じてしまうのではないかと思うが。一回整理したほうがいい。国引きという地域名で使うのか、ジオパークの全体のコンセプトを国引きという現象をコンセプトとして使い続けていくかということ。

委員：この全体テーマは大地が生んだ国引き神話と人々との交流。このテーマがある限りはたぶん島根半島に変えても同じことが起こる可能性はある。

委員長：それはそうだ。

委員：誤解を与えないように、国引きを使うのはよいが、もう少し表現の仕方を工夫したほうがよい。

委員長：ジオパークの名称よりテーマを再検討するようにお願いしますか。

委員：さきほどの議論で、変える力はあるようにみえるので、保留でなく、認められないということでもよいかと思う。ただし、報告書ではわからないが混同しないようにする努力は見られた。きちんと変更したことを提示してもらえば納得できるのでは。

委員長：それはいままで他の地域にしたことと同じ。その上で名称を変更してもらうということでよいか。

委員：名称とテーマの変更を条件とする、ですね。議論も提示してもらう。

顧問：島根半島というのは、国引きの 3 つのエリアのうちのひとつ。よって地元としてはその名称は厳しいと思う。個人的には出雲という名前が好きなのだが、それでは問題が残る。地元が熱心にやっているので、あまりこちらから変更せよと言わないほうがよいと思う。説明をきちんとするということでよいのでは。

委員長：サブタイトルのほうを工夫するようにということか。

顧問：同じことなのだが、名前を変えろと言いたくなるくらい重要なことなので名前も含めて検討せよということ。

委員長：名前とサブタイトルをもう一度検討するように、ということ。なぜかということを整理して、保留として出す。すぐに返答があれば直ちに合格にするか？12 月の委員会までに出してもらう。早く出してもらえれば早く決まるということでよいか。

事務局：保留期間を決めてほしい。

委員長：1年以内と伝える。できれば次の12月の委員会までに提出。決まるのは次回12月の委員会以降になる。ずっとほっとくのであればそれなりの意味があるのでそれはそれでよいのではないか。委員会としては困ることはない。ほっといているのであれば認めない。できるだけ速やかに、と付したらよい。

議題3：委員会構成見直し

事務局：資料の7とA3の組織図をご参照ください。前回の5月の委員会で構成団体の見直しということでユネスコのガイドラインに沿うような形で提案させていただいた。学術団体からの選出ということで日本地球惑星科学連合（JpGU）から選出してはどうかと提案したところ、委員会の席で、適当ではない、偏っているのではないか、という意見があったので、その後、委員でないジオパーク関係者を中心にこの原案を作成した。資料は3種類に分かれており、まず日本ジオパーク委員会（JGC）の機能強化案を事務局から提案させていただいている。次に日本ジオパーク審査制度の改定については詳細を組織図のほうに示している。関係する委員にも入っていただき、JGC強化案の論点についてまとめている。事務局としては、4.の現状のJGC運営の課題のところで必要性をまとめており、特にd.e.g.のところが課題。審査の数が年々増えてきている。今日の審議も1件につき15分の時間設定しかできない。条件付きの認定をすると2年後にさらに増える。委員の方々にはほとんどボランティアで参加していただいており、このような制度も限界があるのではないか。以上のことからユネスコのガイドラインにもあるような選出方法の見直しを行うもの。新しい委員会に変わるわけではなく委員の選出の仕方を見直し、今後もナショナルコミッティーとして認証していただける組織を目指す。本日は時間の関係で原案を示すにとどめたい。今後、次回の委員会までにじっくり機会を設けて検討したい。

委員長：これは前もって委員と事務局と打ち合わせたわけでもなく、事務局案を委員会の席で提示しただけ。日本ユネスコ国内委員会から当委員会が認証された時、委員会の構成について書いてあった。委員会の実態については私も満足はしていない。今日結論を出すわけではないが、この事務局案に意見があればお願いしたい。

委員：現状認識についてコメント。資料では自分の所属はジオパーク関係団体の自然公園財団ということになっている。前任者から聞いた話だが、最初に委員会を作った際にジオパークが国立公園と重なるところがずいぶんあるので、調整が必要だろうから国立公園をよく知っている者に入ってもらったほうがよいという考えから入ったと聞いており、ジオパークの関係団体ということではない。国立公園もジオパークも一緒に盛り上げていけるように自分の知識が役に立てばよいという意識で参加している。なお、今回の事務局の案に対しては、異論はない。

委員：ユネスコのガイドラインにどこまで沿わなければならないか。各国はどうしているのか。他国の状況も含めて日本の状況はどうなのか。

事務局：情報がなかったが、今回APGNに参加した際に韓国の状況は聞くことができた。ガイドラインに沿った形には必ずしもなっていないが、一部沿っている。政府機関が多く入っている状態なのでガイドラインに沿った形での改正を予定しているということだった。東南アジアにおいては

これからコミッティーを作るというところも多いので、このガイドラインに沿った形で構成するという声も聞いた。これからの確実な方向性まではっきり確認はできなかった。

委員長：ユネスコ世界ジオパーク関連の委員会は世界各国にあるが、それとは別に独自の国内のジオパークをどんどん設置している状況を調べてほしい。

顧問：国内ジオパークがちゃんと動いている国としては中国と韓国だと思う。中国が再認定を少し前に始めたとは聞いたが、日本と同様に行っているかはわからない。日本が他の国と異なるのはユネスコ世界ジオパークと同じように行おうとしているところ。個人的にはその部分に関しては別のチームが必要だと思う。

委員長：つまり、日本ジオパーク委員会というのはユネスコ国内委員会から委託された仕事を請け負うのであって日本のジオパークは別に行うべきということか。

顧問：別である必要はないのだが、日本ジオパーク委員会のメンバーで、これから再認定をずっと続けていくのは、皆さん、他に主な仕事をお持ちなので辛いと正直思う。2 日間、委員会を開催できるのであればもっと議論ができるのだが、お忙しい方が多いのでできない。もっと時間をかけられる人が集まって別の組織で報告書を作るのがよいかと思う。

委員長：どんなことでもよいのでご意見を。

委員：既にメールで投げているが、国内のジオパークがなくても UGG の前から世界に推薦する組織が国内にあるはずで、どのように変化しているのかそれぞれ違うと思うので、それがわからないですすめるのはどうか。再認定の負担が大きいのは確かだし、委員長が再認定審査の新しい案を示していただけるという話も前回の委員会であった。

委員長：それについては既に自己評価表の試行ということで議題に入っている。

委員：それをどう効率的にしていくかの議論は必要。とにかく UGG の形にどこまで沿わせるのか、ということと、今の JGC は委員長の呼びかけで設置され、事務局が JGN で、今後もトップに委員長がいて独立した存在であることは変わらないと思うが、今回の案ではいまひとつ見えなかった。独立は担保できるようにしておいたほうがよい。事務局の交代やユネスコ対応などで、この件については議論がされてこなかったのでもっと議論が必要。

委員長：委員長も 10 年になるので交代についても盛り込んでいただきたい。

委員：前回この件が話題になった際、より多くの学会あるいは分野の人を入れるという話があったかと思うが、今回の組織図案のどのへんに反映されているのか。

委員長：地球科学だけに偏らないようにという議論だった。

事務局：実際に審査を行う日本ジオパーク評価チームを作っている。ここにいろいろな専門分野の方に入っていただこうと考えている。また、世界ジオパークの推薦についてジオパーク学術コンソーシアムということで各学会団体との調整はこれからだが、関わっていただけると考えている。

委員長：日本の学術としては内閣府の中に事務局を置く日本学術会議がある。日本のあらゆる分野がそこで連携する。政府から独立した組織で、内閣府が予算をつけている。科学者の国会とも言われている。およそ 2000 の学会が関与しており、グループを構成している。そこからの連携会員が日本学術会議の活動をしている。それぞれの学会でできることは学会でやるが、学会の枠を超えて様々な分野が連携して行う活動は学術会議の中で行うということがされてきている。もうひ

とつはICSU(国際科学会議：International Council for Science）の日本での窓口を日本学術会議が務めている。ジオパークもいろいろな学会が関与していることと、国際的な学術組織との窓口の役割を日本学術会議が担っていることも考慮すると、日本学術会議がそろそろジオパーク分野に関与してもよいのではないかと思うのだが。その部分も含めて議論してほしい。

委員：新しい組織の中でいろいろな学術団体、観光関係などが入ってくるのは当然であり必要であると思う。自然科学の学会に偏っただけではジオパーク自体を維持できなくなってきているのは明確なので、この改定案については基本的に賛成。しかし今のジオパーク委員会のやり方をそのままにして中身だけ変えただけではもう限界だと思う。委員会が事務局機能も兼ねながらやるのは無理がある。いわゆる現地審査、ジオパークの指導、評価する事務局的な組織を置き、実際に審査する機関を委員会にもっていかないと、あらゆる部門の関係者を入れても事務局的なことをしてしまうと時間的に集まることもできないのではないか。ひとつ質問だが、新しい組織の中にJGNがどのように位置づけられているのか。現状からいくと日本ジオパークネットワーク（JGN）は日本ジオパーク委員会（JGC）に密に連携してくれないとうまくいかない。ところが、JGNがこの中に入っていないのはなぜか。

事務局：JGNとJGCは別の組織。審査の独立、公平性という観点から完全に切り離されているものだと考える。一方で活動する側からの意見も審査に反映してほしいという意見もあるので、h.その他関係者というところに、場合によってはJGNからの推薦人が入る。また、g. 国内のユネスコ世界ジオパーク（UGGp）の代表者も現8地域の中から代表になる。よって、hとgがJGNからの立場と考える。

委員：UGGpに関するJGCと国内のジオパークを運営するJGCと分けるということか。

事務局：いえ、同じです。

委員：事務局はどこになるのか。

委員長：事務局がどこになるかはまた別の問題。非政府組織としてどこかに置くというのが議論の対象になっている。どういう事務局をどこに置くのがよいかも含めて議論してほしい。

委員：既存の組織とは関係なく考えていくということか。

事務局：事務局については現状の形でよいかどうかも含めて議論していただきたい。論点整理というところにまとめているが、一つ目はJGCの組織のあり方の中でJGNが事務局を兼ねているということについても検討していただきたい。

委員長：どんな学会が関わるか、事務局をどこに置くか。それで先ほど日本学術会議について触れた。非政府組織であり、その中に関係する学会が連合体を作ってそこに事務局を作ることもできるのではないか。学会連合でやるとか、そこにJGNが加わる等いろいろ方法がある。この件についてはしばらくじっくり検討してほしい。

委員：相当長い時間をかけてということですか。

委員長：いえ、短い時間で。

委員：広い学問分野を考慮すると、学術会議に関わるとよいのではないかと思う。各学会のトップも含めて働きかけをしていくという可能性もある。防災については防災学術連携体のように学術会議と連携して動いているが、そのようなしくみを試行し、それを学術会議が認めていくと有意

義だと思うがどう考えるか。

委員長：現在の学術会議の 3 年の任期が終わり会長選挙を 10 月 2 日に行い、新しい執行部が決まる。そのような時期なので全くわからない。今相談しようとしても相手が不在の状態。

委員：学術会議に関わるのはよいのだが、3 年しかない。長く存続する組織になればよいのだが。

委員長：12 月の委員会でしっかり議論できるようなスケジュールを組んでもらいたい。原案を次回の委員会までに準備したほうがよいと思う。今の原案を練り上げるチームを作って議論したほうがよいと思うがどうか。委員長からお願いして数人の方で集まってじっくり練り上げるということをしてもらえないか。私ももちろん参加するが。それでよいでしょうか。

一同：同意

議題 4：自己評価表の試行について

事務局：昨年の 12 月に行った審査基準検討会において議論し、未定稿となってはいるが一旦まとめている。今回 4 地域の審査において、審査員に実際使ってもらった。その結果非常に好評だったため秋の審査でも使えないかという意見があったので、事務局判断で再審査 10 地域にも送った。現実には即対応できる段階ではないということから現在保留としている。きちんと使えるように詳細を調整すること、いつから使用するかということについて委員会で決定していただきたい。明日の委員も参加する審査基準検討会議において決定すると承認をいただきたい。

委員長：実際に使用された方の意見を出してほしい。明日出席される委員は一部の方なので、ここで紹介してほしい。

委員：逆に、使用しようと思ったが今回できなかったところに質問してみたい。審査結果とは関係ない試行の段階であるがこれに基づいてやりとりしてしまうとその地域がジオパークについてどう考えているかとかいろいろなことがわかってしまう。それはいいことだが、試行にもかかわらず答えが導かれてしまうのはどうなのかという議論がある。活用方法や、ただ点数化するものではない等の共通認識を伝えておかないと困惑するのではないかと思った。実際に使用された方の意見を伺いたい。

委員：今回、十勝岳の審査で、自己評価表を使ってみてどうだったか聞いてみた。事務局の自己点検という意味で役に立つ部分があるということは分かった。しかし、問われている内容が理解できない、回答しづらい項目や議論しないとなかなか評価しにくい項目があったとのこと。審査委員側の使い方としては審査に直接使うということではないが、頭の中に入れて審査に臨んだ。また、審査地域と一緒にその結果について話をしてきた。もうひとつ練る必要があるという感想。

委員長：今おっしゃっているのは自己評価表の採点表で、文章を書くのとは趣旨が違う。この議題の趣旨は？

事務局：自己評価表の内容については随時見直しをかける必要があると思うが、項目についてそれぞれがどう思っているかについて確認する。いつから使用するかは委員会で決定するべきもの。

委員長：何を基準として点数をつけたらよいのかわからない項目が必ずある。それぞれ特徴があるので項目にあてはまらないこともある。その点をどう考えるかを明日検討してもらいたい。

委員：日本版チェックリストができたということは UGG の評価表がだんだん理解できてきたということ。項目についてわからないことがあるということは、そのジオパークが理解していないことが審査でわかってしまうことを憂慮したので、次の再認定で使用することを躊躇した。十勝岳で使ってみて、理解していないということだったのか。

委員：そういうことではない。審査員と事務局でこういう項目で評価するということについてどう考えるかと議論した。評価した結果を議論するのではなく評価項目として使えるかどうかということ。

委員：再認定で評価表を使ったほうがよいのではないかという提案に対し、やめたほうが良いと回答した。評価表については非常に良いと思うのだが、実際に那須烏山と茨城県北においてやってみた。まずあの評価表の内容自体をジオパークがまだ理解していない。何がジオパークにおいて必要なのかということすらわからないまま現況報告書を書いている。その中で採点して、やはり不合格だとは言えないのではないか。周知期間をおき、この評価表に沿って項目ごとに 1 年間どのようにやっていくかという計画をたててもらわずに評価してしまうのはいかがなものかと考える。

委員長：この評価システムはもう少し練り上げるのに時間をかけないといけない。前回でも触れたのは、再審査の委員の手間を少し省いたらどうかということ。委員に書いてもらっている報告書に相当するような自己評価を先方のジオパークに書いてもらおうと。それがうまく書かれていたらこちらの報告書にも引用できるようなものを想定している。そのためには項目を細かく指定しないとうまく書けない。その原案作りをしてみようかと思ったのだが。自己評価書を文章として公表する。委員会の審査結果も公表する。その両方をみてジオパークのことを一般の人が理解する。自己評価書を文章にして報告書として作成してもらうシステムを導入したらよいのではないかと提案した。

顧問：その点については、世界ジオパークの審査が今年から報告書の書式がより詳細になった。実際に審査に参加したのだが、非常にやりやすかった。審査を受ける側も報告書の項目を知っていたので日程の相談が簡単になった。何を見せれば審査員が報告書を書けるか理解していた。是非導入してほしい。

委員長：自己評価表の報告書を書いてもらい、報告書に書いてあることは正直に書いてあるとして、必ずしも確認する必要はないが、それ以外の不明な点について審査に行くというやり方にしようということ。

委員：大賛成。

委員長：明日の会議にはでられないが、その結果を伺って、もう一度考えさせていただきたい。

議題 5：審査に関わる確認事項について

事務局： 7 月 31 日、8 月 1 日両日、全地域の事務局長会議を開催した際、審査にあたっての現地での費用、飲食の関係について議題にした。各地域の運用に沿うが、より透明性を高めるために、審査にかかった経費の明細をすべて委員会の事務局に提出するということを義務付けていきたいと

考えている。この件について委員会で了承していただければ JGN 理事会のほうで決定し申合せ事項としたいと考えている。

委員長：実際の文案を見ないとわからないが、基本はよろしいでしょうか。何かあれば早急にメールで知らせてほしい。

委員：審査時に JGC から各地域に要望事項を出す際にこの件も入れるようにしてほしい。

事務局：わかりました。

委員長：ということでご了承いただき、これで審議はほぼ終わり。他に連絡事項は。

事務局：次回第 32 回 JGC および懇親会を 12 月 22 日金曜日に決定している。10 地域の審査があるので時間については朝から夕方までを予定している。以上。

委員長：この後記者会見がある。審議はこれで終了とする。